

コード No.20-NPF-002

提出日：2021年1月20日

「Social Justice を求める市民活動・連携促進プロジェクト」
20年度報告および21年度助成申請について

報告者： 認定 NPO 法人まちぼっと
ソーシャル・ジャスティス基金 (SJF)
事務局 瀧川恵理

I. SJF の概要と本プログラムの目的

SJF は認定 NPO 法人まちぼっとにより 2011 年 10 月に設立された市民基金であり、社会的公正の実現を理念とし、見逃されがちだが大切な社会課題の解決に向けて、市民の政策提言・社会提案（アドボカシー）とその実現に向けた活動を支援している。それは、資金的な支援と助成先と SJF が社会対話の場を共につくることを両輪として進めている。

本プログラムは 20 年 4 月から 23 年 3 月までの 3 か年で行う。社会的公正を実現しようとする市民活動が分野や領域を超えて学びあい、多様な価値観を認め合い、協力関係を育む機会を創出することを目的に、見逃されがちな社会課題に取り組んできた SJF のこれまでの助成先が連携して有効に活動を広げられるネットワークを形成していく契機とする。また、それぞれの活動テーマに潜在する共通テーマを浮き彫りにし、広範な人びとの共感をよぶ可能性を高め、社会的公正の実現に係る市民活動への関心を喚起する契機とするとともに、資金循環のあり方を探求しその仕組みを提起したい。そのことにより声を上げられないでいる声を丁寧にすくいあげられる市民社会の基盤を強化する一助とする。

II. 20 年度の主な活動内容・スケジュール

当プロジェクトチーム（寺中誠・大河内秀人・土屋真美子・上村英明・瀧川恵理）およびアドバイザーの明戸隆浩さん（東京大学大学院情報学環特任助教／AMSEA[東京大学・社会を指向する芸術のためのアートマネジメント育成事業]スタッフ）を中心としてプロジェクトに取り組む実施体制を整えた。

1、調査分析共有事業

（※助成いただく対象とならなかった事業ですが、当プログラムの基礎となる事業のためご報告申し上げます）

1) これまでの SJF 助成先に取材を行い、助成先と共に考える：

SJF の第 7 回までの助成先延べ 21 団体に 20 年 5 月下旬から 7 月上旬にヒアリングを行った。SJF の元助成先にとって SJF 助成事業で取り組んだ活動がその後、社会に、また当該助成先にとどのように活かされたかを伺うとともに、いま重要と思われる活動テーマ（社会課題）を伺った。背景の共通要因についての考えも伺った。さらに、社会的公正に係る市民活動の資金獲得の可能性分析の

観点からも伺った。

また、20年度に助成中のSJF第8回助成先には、20年6月の中間報告にて同様に考察していただいた。

2) 課題の抽出と展望：

ヒアリングを通して助成先から挙げられた活動テーマや背景要因・共通テーマについて、アドボカシーに重要な評価5軸(※)それぞれの切り口から分析的に具体的課題をとらえる形でまとめ、Social Justiceの観点から社会課題について構造化し、市民社会の今後の課題を展望した。主に20年7月から8月に行った。

※アドボカシー評価軸：

SJFがこれまでの助成事業の成果効果を分析した結果、アドボカシーを成功に導く重要な評価軸として導出したもの。

- i. 当事者主体の徹底力
- ii. 法制度変革への機動力
- iii. 社会における認知度の向上力（助成テーマについて）
- iv. ステークホルダーとの関係構築力（相反する立場をとる利害関係者との関係性を良好に築いたり保持したりする力）
- v. 持続力

◆分析結果は、別添の2つのファイル「SJ連携プロジェクト ヒアリング分析総論」（分析総論）と、「『Social Justiceを求める市民活動・連携促進プロジェクト』ヒアリング分析表」（分析表）をご参照ください。これらは内部資料としてお取り扱いください。

分析の概略：

「ともに生きる」。これを核に、循環的構造がうかがえる4つの根源的テーマを浮かび上がった。助成先が提示したテーマを、その4つの要素を含む度合いをもとに、並べてみたものが分析表となっている。この位置の距離が活動テーマ同士の近さを表しているともいえるが、逆に、位置が遠い活動と連携してみることで、あらたな参加者・支援者にリーチできる可能性が高まるだろう。なお、この並べ方は固定的なものではなく、ご自身の活動をいろいろな位置に配置しなおして連携イメージを広げていただけたらと考えた。

また、5つのアドボカシー評価軸SJAF (Social Justice Advocacy Factors) で、助成先に提示いただいた課題や展望、活動方針・手法をもとに、評価軸ごとに考察したことを分析総論に記載した。

助成先がアドボカシー評価軸別の強み・弱みを補強しあうような連携を考案する一助となればと考えている。具体的な評価軸別の課題や展望などは分析表をご覧ください。

3) 助成先へのフィードバック：

20年8月に助成先と上記の分析結果（分析総論と分析表）を共有するとともに、連携フォーラムでのプレゼンを希望する助成先を募り始めた。その際、連携プロジェクト助成の概要も助成先に案内し始め、連携フォーラムを、異分野を掛け合わせた気づきから連携プロジェクトの創造につながる企画として活用頂きたい旨伝えた。

2、連携フォーラム事業の企画立案

社会的公正を目指す市民活動のエンパワメントにつながるような連携のきっかけをつくる企画

として、連携フォーラムを 21 年夏頃に開催する。上記 1、の助成先へのヒアリングとその結果の分析等により明確になった社会課題への取り組みについての展望を発表しあって交流し、知恵を出し合う。

この企画を、助成先の意向も伺いながら立案を進めた。

- ◆詳細は、別添のファイル「**Social Justice 連携フォーラム 企画案 202101**」をご覧ください。
御財団にぜひご挨拶を賜りたくお願い申し上げます。

3、連携プロジェクト助成事業の企画立案

連携プロジェクト助成の募集要綱と申請書の案を策定した。

この助成募集は、社会的公正を実現しようとする市民活動が分野や領域を超えて学びあい、多様な価値観を認め合い、協力関係を育む機会を創出することを目的に、見逃されがちな社会課題に取り組んできた SJF 助成先と連携して、有効に活動を広げられるネットワークを形成していく契機とする。

また、それぞれの活動テーマに潜在する共通テーマを浮き彫りにし、広範な人びとの共感をよぶ可能性を高め、社会的公正の実現に係る市民活動への関心を広く喚起する契機とする。

従来の発想の枠にとらわれずに連携してみようとする試行錯誤を応援する。

- ◆詳細は、別添のファイル「**SJ 連携プロジェクト助成募集 2021 要綱 案**」と「**SJ 連携プロジェクト助成 2022 申請書 案**」をご参照ください。

修正すべき点等ございましたら、ご教示を賜れましたら幸甚です。

III. 活動評価、今後の活動予定と助成申請

当プロジェクトを御財団に申請いたした時点では全く予想しえなかった新型コロナ禍にみまわれた 20 年度であった。「ふだんから脆弱な立場に置かれた人々はさらに深刻な影響を受け、困窮に陥っている」、「日本社会が日頃抱えている課題が顕在化し、より悪化している」と SJF 助成先の方々は指摘した。

よりよい社会へ、前向きに転換していく鍵を、当プロジェクトの一環でヒアリングした SJF 助成先の方々は見出し、具体的な活動に取り組み始めていることが伺えた。試行錯誤中であつたり、大きな変化を経験中であつたりする状況を受け止められたことに力づけられたといった助成先からの声もあり、時機を得たプロジェクトとなった。

世界的に連帯が呼びかけられ、監視強化の流れに飲み込まれないよう市民自身の判断による真つ当な行動の重要性が強調される中、既存の枠組みを超えた発想は市民活動においても危機を打開するために必要となっている。当プロジェクトの一環である連携フォーラム事業や連携プロジェクト助成事業は、そういった発想の一助となることを意識して、助成先に参画を呼び掛け、企画を練ってきた。潜在していた社会課題が顕在化したことは、それが共通テーマとなる市民活動が連携する契機となり、広がり深化しえる状況となりつつあるようだ。

来る 2021 年度は、連携フォーラムの実施に向けて助成先や関係者の方々とより詳細を詰め、実行する。また、連携プロジェクト助成の実施要綱を助成先のニーズを拝察しながら確定させ、応募と選考を実施し、助成金の支払いを行うというように、当初 3 か年プロジェクトとして御財団に申

請いたした予定にそって行う基本方針である。

連携フォーラムや連携プロジェクト助成に対する SJF 助成先の期待は高く、これらの事業へ、御財団から 21 年度のご支援を、弊基金が 20 年 2 月に申請いたしたように賜れますよう切にお願い申し上げます。申請内容及び申請額については、2020 年 2 月当初の申請書から変更はございませんが、同文書「庭野平和財団 基盤整備助成プログラム SJF 申請書 20200214」を添付いたします。

SJF 助成先が提示したように、「声なき声に耳をかたむけ、かたちにし、必要なところに届けるアドボカシーのしくみ」で、「被害をうけている当事者の多くは、バッシングを恐れて声をあげることができずにいるため、可視化が難しい状況にある」ことを変えていきたい。「マイノリティが『いない』のではなく、『見えない』存在となっていることに起因する多様性への無理解と差別」を解き放っていきたいと考えている。

Social Justice が昨今の世界状況のなか、ますます重要になっているのではないかと。社会的公正に係る市民活動、ひいては、声を上げにくい困難を抱えている人が湧活されるよう、ご支援とご鞭撻を今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

以上